

2025 年度 慶應義塾大学 一般選抜

環境情報学部小論文 出題意図

ここ数年の AI の進化は著しく、作業の効率化や迅速化、高度化のために不可欠な存在になりつつあります。大規模言語モデル（以下、LLM）の活用も、生産性を高める観点からも、幅広く利活用が進められています。ただし、生成された文章を盲目的に使うのではなく、きちんとその内容を比較検討する能力が求められます。LLM はその仕組みを踏まえても、記載された内容の適正性は担保されておりません。問 1 において提示した 3 つの要約文は、課題文のどこに力点を置いているかが異なっています。本文と比較した上で、個々の要約の差異を把握・解説できる能力を求めています。なお、課題文は、野家啓一氏の著作「科学哲学への招待（ちくま学芸文庫）」の中で、仮説演繹法に関してまとめた部分を抽出し用いています。仮説演繹法は、古典的な科学方法論であり、今後学生が研究活動を進めるに際し、無駄にはならないと考え、テーマとして採用しました。

このように、問 1 が読解力を求めるものであったのに対し、問 2 は、受験生の発想力を求めています。受験生の提案が、一過性の思いつきにとどまらないように、問 2（1）で「取り組み」や「仕組み」をモデルとして提示し、問 2（2）において、その具現化手法を提案する構成としました。ここで提案された内容を具現化するための具体的な知識や手法などを大学で身につけ、社会で活躍されることが期待されます。